

第11回 The 11th Annual Meeting of Japanese Society of Drug Safety

日本医薬品安全性学会学術大会

会
期

2025年8月2日^土～3日^日

会
場

名古屋コンベンションホール

〒453-6102 愛知県名古屋市中村区平池町4-60-12 グローバルゲート

大
会
長

山田 成樹

藤田医科大学医学部 薬物治療情報学講座 教授

藤田医科大学病院 薬剤部 部長

運営事務局

ちたクリエイティブ株式会社

〒456-0055 名古屋市熱田区南一番町6-23-1

TEL:052-387-5228

E-mail: jasds2025@c-bind.jp

<https://c-bind.jp/jasds2025/>



医薬品安全性を 極めよう!

～Be The Best Safety～



後援: 一般社団法人 愛知県病院薬剤師会、岐阜県病院薬剤師会、三重県病院薬剤師会、静岡県病院薬剤師会

第11回 日本医薬品安全性学会学術大会 プログラム

理 事 長 講 演 日本医薬品安全性学会の未来に向けてーこれまでの発展と今後の展望ー

演者 一般社団法人日本医薬品安全性学会 理事長 佐藤 光利

シンポジウム 1 9月30日を医薬品安全性の記念日にしよう！ー身近な医薬品から患者を守るにはー

国際薬剤疫学会代表を務めたJerry Avorn氏は2006年のN.E.J.Med誌で「9月30日を医薬品安全の不名誉の日に」と訴えた。2004年のこの日に、ロフェコキシブが心筋梗塞や脳卒中のリスクを2倍に高めたことを理由に回収された。この事件はICE-E2Eなど世界中の市販後臨床のあり方を見直すきっかけとなったが、日本ではどうだろうか。日本でも頻用されているNSAIDs、帯状疱疹に対する抗ウイルス薬療法、長期間の服用が必要なSGLT2阻害薬に焦点を当て、このような身近な医薬品から患者を守るためには、オール薬剤師で投薬の前から切れ目なく安全確保や副作用回避を図る必要がある、その重要性について理解を深めたい。

シンポジウム 2 感染症治療薬の安全対策ー症例から見てきた問題点への対応ー

本シンポジウムの目的は、感染症治療薬の安全管理の問題点を探索・分析し、具体的な対応策の提言にある。感染症治療薬の安全性の問題点は、重大副作用、アレルギー、薬物相互作用、特殊病態下での薬物動態の変化、妊婦や授乳婦の使用制限、長期使用、耐性菌の出現など多岐にわたる。それ故、抗微生物化学療法には、多面的な安全管理が求められる。本シンポジウムでは、感染症治療薬による症例を提示し、安全上の問題点と対応について考察する。さらに、抗微生物薬の供給不足下での適切な薬剤選択についても議論する。本シンポジウムは、感染症治療薬安全対策部会が企画した最初のシンポジウムであり、感染症治療薬の安全性の向上を推進する。

シンポジウム 3 ちょっと先の未来地図ーデジタルとAIが拓く薬剤師業務の新知識と挑戦ー

デジタル技術は想像を超えた速さで進歩し、AIは私たちが恩恵を受けていると認知していないだけで多くのところで実走され生活の一部になっている。医療においても多くのIT業界の方が変革に取り組んでおり、薬剤師は医薬品情報のアップデートと同じくらいデジタルツールのアップデートが必要となっている。今回はAIやデジタル技術の活用がもたらす少し先の未来における薬剤師に必要な知識と挑戦すべき事について、参加者と共に考えたい。

シンポジウム 4 各種診療ガイドラインを周産期薬物治療に活かす

周産期における薬物治療の実践に際しては、医薬品添付文書のみならず、多くの情報源を確認する必要がある。中でも、各種診療ガイドラインにおける記載は、原疾患の治療・管理を念頭に、専門家らによって周産期管理が検討された上で記載されている。そこで、本シンポジウムにおいては、各種診療ガイドラインにおける周産期薬物治療に関する記載の現状を理解・考察し、実際の周産期薬物治療において、医薬品の安全性という観点で、各種診療ガイドラインをどのように活かしていくべきかについて議論したい。

シンポジウム 5 医療DX時代到来!! 医薬品安全にデジタル技術をどう活用していくか?

医療業界全体ではデジタル化の普及は遅れていたが、近年のコロナ禍においてオンライン診療や服薬指導、カンファレンスなどが急速に進展し、医療DXが国の主導で加速している。特に国ではオンライン資格確認を基盤とした情報共有が稼働し、保険薬局では患者の薬剤情報へのアクセスが向上し業務効率化が期待されている。このような状況下において医薬品の安全性といった観点からもさまざまなデジタルツールの活用が期待される。本シンポジウムでは電子処方箋をはじめ、様々なデジタルツールを活用した医薬品安全への取り組みについて紹介するとともに、現状における問題点、今後の展望についても広く議論する機会としたい。

シンポジウム 6 探索から検証へー副作用データベースにおける実践的アプローチー

近年、副作用データベース研究は医薬品の安全性評価において急速に注目され、数多くの仮説生成研究が実施されています。しかしながら、これらの研究は生成された仮説の検証が十分に進んでいない現状があります。副作用データベース研究において仮説検証的研究は発展途上であり、検証手法や評価基準の確立が求められています。本シンポジウムでは、探索的研究の成果と課題を共有し、検証的研究の重要性と実践的な方法を学ぶことで、データベース研究全体の信頼性向上と医薬品安全性評価の確立に寄与することを目的とします。

シンポジウム 7 研究者と現場薬剤師のI型・T型・H型人才が協働するとどうなる?ー帯状疱疹治療薬の安全性を極める!

I型人才とは、専門性に特化したスペシャリスト的な人材で、研究者が該当するとされる。そして、T型・H型人才は強い専門性を誇る分野が1つあり、広く他の分野に知見を持つ人材(T型)、他人の専門性を横軸で繋げられる架け橋となる人材(H型)を指す。今回、化学・病態・薬物動態各領域におけるI型・T型人才の専門性を、医薬品副作用情報部会メンバーがH型人才として臨床につなぐ架け橋となり、帯状疱疹治療薬の安全性を極める個別最適化を目指した。その成果(イノベーション)について紹介すると共に、基礎薬学を活用した使い分けにより、帯状疱疹治療薬の安全性をいかに極めるかについて考えてみたい。

シンポジウム 8 認知症薬物治療のアップデートー薬物治療の適正化を思考してー

認知症の薬物治療環境は、コリンエステラーゼ阻害薬の3剤とNMDA受容体拮抗薬1剤が発売されてから13年間大きな変化がなく停滞していました。しかし、2023年にレケンビ(R)点滴静注、2024年にケサンラ(R)点滴静注液がモノクローナル抗体製剤として発売され、2023年にドネベジルの貼付製剤であるアリドネ(R)パッチが発売、2024年にはレキササルティ(R)に認知症BPSDの適用が追加されて、薬物治療環境に賑わいがみられています。さらに2025年には地域包括ケアシステムが完成して、今、認知症への対応が大きく変わろうとしています。この変化に薬剤師がどのように対峙するのかを医療安全の面から考えたいと思います。

シンポジウム 9 一つ一つの薬を評価する、それが私たちの使命です!ーポリファーマシー解消の第一歩ー

ポリファーマシーの解消には、多職種連携、地域連携などが必須であるが、その第一歩は薬剤師が薬剤と患者を総合的に評価し、薬の必要性を評価することである。しかし、急性期病院においては患者の在院日数が短く、保険薬局では患者面談の時間は限られている。限られた時間の中で効率よく評価するためには、ツールを活用し効率的に行うことが求められる。一方で、ツールはあくまで補助的なものであり、薬学的視点に基づいた薬剤師による患者の個別評価が不可欠である。本シンポジウムでは、ツールの活用事例や課題を共有し、どのように一つ一つの薬を評価し、ポリファーマシー解消を進めていくかを議論したい。

教 育 講 演 1 薬物と性差

演者 静岡県立大学 薬学部 生体情報薬理学分野 黒川 洵子

教 育 講 演 2 生体における亜鉛の重要性ー疾患の発症との関連・治療/予防への応用ー

演者 鈴鹿医療科学大学薬学部 免疫制御学研究室 西田 圭吾

教 育 講 演 3 有害事象自発報告ビッグデータを用いた医薬品適正使用に係る研究

演者 岐阜薬科大学 医薬品情報学研究室 中村 光浩

教 育 講 演 4 薬剤師に期待する:Pharmacist/Scientistの視点を持つ

演者 特定非営利活動法人 医薬品適正使用推進機構 鍋島 俊隆

教 育 講 演 5 医薬品の安全性データを読み解くー臨床試験、疫学研究、そして実臨床でできることー

演者 独立行政法人医薬品医療機器総合機構 健康被害救済部 中林 哲夫